



震災の記録 震災当日から学校再開まで、そして間借りしての学校生活

東松島市立浜市小学校

1 震災当日の様子

地震が発生した3月11日午後2時46分は、5校時が終了する時刻で、児童167名、教職員14名、学校出入り業者2名が校舎内にいた。児童は、大きな揺れの中でも怖さを我慢し泣き叫ぶことなく、各教室で教師の指示により机の下に頭・体を入れ、避難訓練の時のようにしっかりと机の脚をつかんでいた。地震が収まった後、学級担任は指示があるまで児童を教室で待機させていた。

長い揺れが収まった後、教頭は校内を巡視し、大きな破損、崩落はなく、校舎が安全であることを確認した。前年に行った耐震補強工事が被害を最小限に食い止めたようだ。教務主任は、停電したのでカーテレビから情報収集するため自分の車の所へ行った。大津波警報が発令されたのが分かったので、校長は校庭や体育館への避難は危険と判断し、全校児童を校舎内に待機させ、さらに、教室が1階だった1年生を上階に避難させることにした。1年生は幼いながらも大変なことが起きていることを理解していて、担任の話真剣に聞き、皆無言で整列して2階の理科室に移動した。理科室に入り、担任は余震に備え大きな実験台の下に6～8人ずつ入れ、実験台の足をしっかりと握るように指示をした。この間、特別支援補助員が1階廊下まで児童の防寒着を急いで取りに行き、全員に防寒着を着せることができた。

午後2時55分ころから地域住民が徒歩や車で学校に避難してきた。消防団員も大津波警報発令の情報をもって学校にきたので、避難民の誘導について話し合い、このまま3階音楽室に避難させることにした。校舎で一番高い所は、



津波に流され玄関に突っ込んだ車

屋上と同じ高さの3階音楽室だけだった。校長、教頭、事務主事、用務員は、次々に避難してくる地域住民を、土足のまま3階音楽室へ避難するよう誘導した。また、避難してきた男子中学生の協力を得て、体育館からござや1階保健室にあった布団1組を校舎2階や3階に運んだ。そして、大地震の後児童の安否を心配した保護者が迎えに学校に駆けつけたので、各学級担任が対応して手順に従い引き渡しを行った。大津波警報が出ているので校舎にとどまるよう呼びかけたが、20名の児童が保護者と一緒に帰ってしまった。また、避難してきたお年寄り1名が具合を悪くしたため、代替養護教諭が初期対応を行ったが、治療が必要と判断し、救急車で搬送を要請した。救急車が到着し、3階で救急隊員が救命措置を行い搬送しようとしていたところに津波が来襲した。



湖のようになった校庭と校舎前の瓦礫の山

津波は、午後3時40分ごろに、家屋や多くの車を巻き込みながら真っ黒い波が白波を立てて校舎に向かってきた。玄関や教室の窓は簡単に壊され、1階はあっという間に水没してしまった。波は、1階と2階の間の踊り場を越えたところで止まった。津波は第2波、第3波の方が高い波が来ることがあると言われているので、2階にいる児童や避難民を屋上に上げることにしたが、屋上のドアの鍵は水没した1階の職員室に置かれていた。ドアを壊すことを検討していたところ、6年生教室にスペアキーがあることが分かり、屋上に逃げられるようにドアの鍵を開けることができた。

津波が止まったところで、教職員はこれから必要になる飲料水とトイレの水を確保するため、水道水が止まる前にペットボトル、やかん、鍋に水を集めた。また、夜に備え理科室にあった教材の豆電球と乾電池を使い、簡単な電灯を作った。

学校側（校長・教頭・教務主任）、消防署員、消防団員、地域住民、救急隊員が集まり、災害対策本部の話し合いをもち、以下のことを決めた。

- 交代で見張りを立て、第2波、第3波に備える。
- 3階には、女性、高齢者、児童全員を避難させ、大人の男性は2階の教室に入る。
- 翌朝6時に避難している人数の確認を行う。それまで各階で人数確認をしておく。
- 津波の第2波、第3波の来襲に備えて屋上に本棚、机等を運び風よけを作る。
- 確保してある水は、節約しながら使用する。
- 低体温症にならないように気を配る。
- 二次被害を防ぐため、流されている人や屋根の上で救出を求める人等を無理に救助しに行かない。

災害対策本部の話し合い終了後、この日は雪が降り風が強かったので、2階の教室から本棚・教卓・机を屋上に運び、風よけのフェンスを作ったり、水を運んでおいたりし

て、いつ屋上に避難することになってもいいようにした。学校の周りは、波が引かず湖のようになり、完全に孤立してしまった。

午後6時ころ、校舎下に流されてきて積み重なった車の中に避難者2名を発見し、消防署員が2階からカーテンをロープ代わりにして降りて救助した。しかし、このころ具合を悪くし救急車で搬送しようとしていたお年寄りも、残念なことに亡くなってしまった。



津波で流されてきて校舎の前に積み重なった車

教職員は児童を管理するとともに、避難民に確保してあった飲料水を配る等、要望のある物を可能な限り提供する支援を続けた。さらに、簡易電灯を階段や各教室、トイレ等に設置し灯りがあるようにした。3階音楽室内は避難民で足の踏み場もなく、階段や踊り場にも人があふれていたため、夜通し教職員が交代で簡易電灯を持ち、室内を少しでも明るくするようにした。音楽室や準備室にいた6年男子が機転を利かせて楽器を2階理科室へ移動させ、避難民が入れる空間を広げてくれた。地域住民の方々も、一緒になって本棚や外国語活動で使う用品等の運び出しに協力してくれた。

夜になり、トイレが使えなくなったため、屋上の一面に教職員で男女別の野外簡易トイレを設置した。2階の教室には男性が避難していたが、津波で破壊された一階の窓から寒風が吹き込むので、少しでも寒さを和らげてもらうように、体に巻くためのござを切って配布したり、カーテンを配ったりした。風よけにブルーシートも張り、踊り場にいた方々が体の下に敷いて防寒できるよう、暗幕や辞書・本等も配った。また、教室にあったCDラジカセに電池を入れ、情報が得られるようにした。

消防団員から、エコノミー症候群にならないように、時々体を動かす等体操をさせるようにと指示され、1時間おきに体操の声がけをした。5年生女子が率先して明るい歌を歌い、体操をもり立ててくれた。午後9時を過ぎると疲れた子どもたちが丸くなって寝始めたので、夜間の声がけは小声で2～3回にとどめた。

夜が明け、3月12日午前5時40分に児童を集め、健康観察と人数確認をした。児童147名、教職員14名、学校出入り業者2名は全員元気だった。午前6時になり、災害対策本部を開いて浜市小学校に避難している人数を確認した。合計405名が一夜を明かしたことが分かった。このころ、保護者1名が腰まで泥につきながら、コンビニからお菓子等の食料を調達して学校に届けに来てくれた。早速全児童に分け与えた。その後、5～6回往復して食料を届けてくれた。

朝方から市役所職員、消防署員が状況確認や連絡のために、行き来するようになった。学校近くの病院から医師とその家族が避難してきて、早速避難民の対応に当たった。また、児童を迎えに保護者が来るようになったので、確認をとり児童を引き渡した。市側より、再度津波が来る恐れがあるので、学校の周りの水が引き、手配したバスの到着を

待って浜市小学校校舎から宮城県東松島高校に移るようこの連絡が入った。午後1時ころより、教職員は、移動用のバスに乗る避難民の順番を決めたり、案内や誘導に当たったりした。このころから、救援物資や食料も到着し始めた。午後5時ごろ東松島高校に向かう全員のバス移動が完了した。教職員も東松島高校に移動した。

2 避難所の運営について

3月12日夕方から3月31日まで宮城県東松島高校が避難所となった。東松島高校の保健室が浜市小学校職員室となり、教職員は泊まり込みながら、24時間体制で以下のとおり避難民への対応に当たった。

- 支援物資の受け取りや配給，要望がある生活用品配布の支援
 - 避難民への電話や来訪者からの問い合わせ対応や連絡板の設置
 - 避難民による自治組織立ち上げや打合せ運営の支援
 - 介護ボランティアとの連絡調整や必要物資の調達・配給
 - トイレ用の水をプールから汲むための折衝と水汲み当番の支援
 - 発電機・照明器具調達のための連絡調整や配線工事，暖房機の設置，電気，暖房機を使う際のルールづくり
 - 東松島高校と避難民側との涉外窓口や児童・中学生の健康チェックと学習会の実施
- 震災直後の浜市小学校には、食料，水，毛布，医薬品，無線，発電機等，避難所を設置するための備蓄が全くなかった。東松島高校も同様であった。東松島高校に移ってからも、浜市小学校の教職員が避難所運営に当たったが、施設・備品の使用等について、一つ一つ高校側に許可を求めたり相談をしたりしなければならなかった。その後、市職員が配置されたが、避難民と東松島高校の仲介は引き続き浜市小学校の教職員が行った。

3 学校再開までの教職員の主な取り組み

教職員は、避難所運営の支援を続けるとともに、手分けして、震災当日に帰宅した児童の安否の確認，現在の居場所の確認，学習会の運営，浜市小学校校舎の後片付け等を行った。

震災当日に帰宅した児童20名の安否確認は、電話をかけたり、住んでいた場所，姿を見かけた情報があった場所，避難所，保護者の勤め先等に行ったりして確認をした。最終的に20名全員が無事と確認できたのが3月18日だった。最後の子が元気であることや居場所が分かったときは、教職員の間から大きな歓声や拍手が湧き起こった。

また、毎日浜市小学校校舎に行き、後片付けや震災日から教室に残したままだった児童の学用品を保護者に引き渡せるよう、児童個人ごとに袋詰め等を行った。1階の天井まで浸水したため、パソコン，サーバーは壊れ、文書等は汚濁し継続しての使用は出来ない状態だった。津波に流され横倒しになった耐火金庫の中の重要書類もほとんどが泥水をかぶり，汚濁していた。しかし，震災前に作成済みだった卒業証書が，少し濡れた

だけで、奇跡的に汚れていない状態が出てきた。このときも教職員から歓声が上がった。

早い時期に児童の日常を取り戻すことが大切と考え、学習会を3月17日よりスタートさせた。小・中学生を対象に、東松島高校の空き教室や他の避難所の空き部屋を借りて行った。教材は、近隣の学校、教職員の家族等から提供してもらった。健康観察や諸連絡をした後、毎日1時間ずつそれぞれの課題に取り組みさせた。午前9時と午後3時には避難所内の掃除も行うようにさせた。避難所にいた他校の小・中学生も参加して4月20日まで続けた。

卒業式と修了式を3月28日に東松島市立小野小学校体育館で行うことになり、その連絡を、メール、電話、保護者同士の伝言等で行ったり、学習会を通じてお知らせを配布したりした。お知らせは各避難所、市役所、コンビニにも掲示した。卒業式と修了式の当日は、市側からスクールバスを出してもらい、卒業生はいろいろな避難先から全員が参加できた。会場の全員が平服だった。式では、校長が奇跡的に汚れなかった卒業証書を一人一人に授与した。児童全員がよく無事だったという思いもあり、会場の多くの職員・来賓・保護者の目には光るものが見られた。修了式では、校長より全校児童に、今回の震災の経験をとおしての教訓、人の命や人々との絆がいかに大切か等について式辞があった。

3月31日に東松島高校を撤収した。浜市小学校校舎は壊滅的な被害を受け使用できなくなったので、4月1日より小野小学校3階を間借りすることになった。音楽室を職員室にして学校再開の準備を始めた。教職員はそれまでと同じように、学習会の指導、居場所の確認、浜市小学校校舎の片付け方や、備品回収、児童一人一人の学用品の袋詰め作業に取り組んだ。そして、4月2日に浜市小学校校舎で個人ごとの学用品を保護者に引き渡した。その後、教職員、保護者等で校舎内の瓦礫や泥の片付けを行ったが、震災後初めて校舎1階に入る保護者は、被害のすごさに驚いていた。引き渡せなかった学用品は、スクールバスで小野小学校に搬出した。

4月13日には、学生ボランティアの支援を得て、自衛隊のトラックで浜市小学校から机、いす、備品を小野小学校に運ぶことができ新学期を迎える準備が進んだ。

4月14日～16日は、アメリカ軍が「トモダチ作戦」の一環として、浜市小学校校舎、体育館内から瓦礫、泥の撤去を行った。自衛隊、教職員も一緒になって作業したが、彼らの一生懸命な働きぶりに驚くとともに感謝の気持ちでいっぱいになった。



泥をかき出してくれた米軍



奇跡的に助かった卒業証書

4月18日に職員室の事務机・いす，足りなかった児童用机・いすが搬入された。少しずつ学校としての環境が整い，教職員も新学期が迎えられるという実感をもつことができた。また，別の学区からの通学で多くの子がスクールバスを利用することになり，バス担当を中心に個人ごとの乗降場所等の確認作業にも取り組み始めた。

このころより，学用品等をいろいろと支援してもらえるようになった。津波来襲時，1階が教室だった1年生は，学用品のすべてが流失してしまったので，教科書は再発行，学用品・運動着は業者より献品してもらうことになった。ランドセルは，支援物資を配給してもらった。ほとんどの新1年生も，購入していた学用品等が津波で流出したので，業者より献品してもらった。衣服，靴等の支援物資もあり，新学期が始まった後，保護者にお知らせして参観日に配給した。

いよいよ新学期のスタート。4月21日の午前中に，小野小学校と交代しながら平成23年度着任式，第1学期始業式，午後から入学式を行った。児童は，待ちかねたように元気な笑顔で登校してきた。教職員もこの日が来ることを本当に心待ちしていた。入学式では，自衛隊の音楽隊による国歌や校歌の演奏があり，これまで多くの困難を乗り越えてきたこともあり，会場が一つになり感慨深く感動的な式となった。

4 他校に間借りしての学校生活



6台のスクールバスが運行



スイスからのぬいぐるみの支援

平成23年4月21日より，本校は同じ中学校区内にある小野小学校の3階全部を間借りして新学期を始めた。93%の児童がスクールバスを使って登下校することになり，バスの出発時間を考慮して活動を行わなければならないことや，授業時間の時程の取り方に注意しなければならなくなった。そのため担当が新たに設けられ，東松島市教育委員会・小野小学校・バスを利用している他の学校と緊密な連絡調整を行いながら，スクールバスを運行することになった。

学校が始まると国内外から様々な支援の申し出が来るようになった。支援物資の配給が毎日のようにあり，件数，個数が多いため，保管場所等を含め，その対応や処理に留意しなければならなくなった。校舎のスペースに限りがあり，物資の置き場所がなく苦慮した。緊急学校支援員・震災派遣の事務職員やボランティアを活用して，支援物資の

整理や管理を行った。12月になり、仮設の特別教室棟ができたので、保管場所のスペースは少し余裕ができた。

また、学生ボランティアの支援の申し出が多くあり、いろいろな大学の学生に児童の学習補助や、支援物資の整理等をしてもらった。宿泊学習の引率補助をしてもらった時に、具合を悪くした子の手を握りずっと励まし続けた学生もいた。彼らの献身的な働きには本当に頭の下がる思いである。児童も一緒に勉強したり遊んだりすることを大変喜んでいるので、今後も学生ボランティアに来てもらえることを希望している。



学習支援の学生ボランティア

教育活動については、小野小学校3階を間借りしての中で、ほぼ通常通りの活動ができていますが、施設を共同で使うため、行事等は小野小学校と連絡調整をしながら行う必要が出てきた。毎年春に行っていた運動会は、始業式が遅れたこともあり秋に行った。練習場所や時間等を考慮し、小野小学校、浜市小学校それぞれ単独で行った。学芸会も時期をずらして、それぞれ単独で行った。しかし、マラソン大会や校内書き初め展は、練習場所や開催場所の問題により本年度の開催を見送った。委員会やクラブ活動については、同じ施設にいてることを生かし、両校の教員が協働で児童の指導に当たっている。

浜市の地域全体が壊滅的被害を受け、多くの家庭が壊れた住宅を修理しての生活や仮設住宅での生活を余儀なくされているため、不自由な環境で暮らす児童が大勢いる。様々なストレスからか、5月の連休明け当たりから精神的に不安定になる等、学校生活に変化を見せる児童が出てきた。多い日は一日に10人ほどが保健室を兼ねる職員室に体の不調を訴えて来るようになった。精神的な変化を見せる児童には、管理職も含め全校体制で指導に当たるようにしたが、さらに他県から震災支援に来ていたカウンセラーに週1回の派遣を要請し心のケアに努めた。その後もカウンセラーを増員してもらおう等、児童に寄り添った指導の結果、不安定だった児童の多くは落ち着きを取り戻しつつある。

P T A活動についても、仮設住宅や避難所が学区外を含め広範囲に広がっていることや、津波で車を失ったり、離職を余儀なくされたりした保護者がいるため、保護者を集めての活動ができにくくなったので、今年度は集まる機会を減らす等の配慮をしている。

教員については、他校に間借りしているために様々な制約がある中で活動しなければならないことや、精神的に不安定になった児童への対応、毎日のスクールバスの安全指導等、震災に伴う新たな業務が出てきた。また、事務職員も、津波により失われた事務関係書類、データを新たに作成しなければならないことや、震災により準要保護児童が増えたため、事務処理量が膨大になった。このような状況下で、教職員の疲弊も心配される場所であるが、徐々に震災加配教職員、震災支援員が配置されてきており、大きな力となっている。また、教職員の多くも被災しいろいろな影響が出ているが、日本国内外の心温まる支援を心の支えとし、同僚同士で声を掛け合い助け合う等、心のケア、サポートに努めているところである。